九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

貞方弥三郎と柳浦文集

柴田, 篤
福岡教育大学

https://doi.org/10.15017/18092

出版情報：中国哲学論集. 11, pp.70-89, 1985-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

貞方弥三郎と柳浦文集

柴田篤

一、はじめに

ここに翻刻紹介する書物は、貞方研が自ら撰輯した『柳浦文集』の自筆原稿である。貞方研、通称弥三郎（明治元年～昭和三十二年、一八六八～一九五七）は、五島小値賀島（おちかしま）の出身で、山崎闇斎学派の流れをくむ朱子学者楠本碩水（名は孚嘉、一八三二～一九一六）の門人である。碩水は、その兄楠本端山（名は確蔵、一八二八～一八八三）と共に西海の二程子と称された人物であり、若い頃平戸藩の儒学者として活躍し、維新後郷里針尾島にあって学究体認と門人教育の生涯を送っている。端山・碩水の生涯と学問については、岡田武彦氏『楠本端山』（昭和三十四年、積文館書店発行）及び『叢書日本の思想家・42』（昭和五十三年、明徳出版社発行）所収「楠本端山」、藤村禅氏『楠本碩水伝』（昭和五十三年、芸文堂発行）にそれぞれ詳しく論じられている。また両者の著述は、近年『楠本端山・碩水全集』（昭和五十五年、葦書房発行）として編集刊行されている。碩水の門には先後して多くの学徒が従学しているが、中でも学識高く、文章に秀で、恩師の著作を校訂出版する事業の中心となったのは、岡彪郁（名直養、字子直、通称次郎、一八六四～一九四九）である。彪郁門弟の赤塚光男氏に『岡彪郁翁と崎門の朱子学』（昭和三十五年）という労作があり、その生涯と思想について知ることができる。また彼の著述は、未刻のものも多く遺されているが、『彪郁文集』二巻（昭和十五年、虎文斎発行）が公けにされている。彪郁と同門で、親交も久しく、彼を指して「実に楠本両先生の学を伝えて、崎門道学の一線を存す。」と評したのが、貞方弥三郎である（「岡彪村先生八十有五寿序」草稿）。貞方弥三郎については、僅かに藤村氏が『楠本碩水伝』で、彼の碩水宛書簡等を引用しながら、碩水との関わりの中で言及しておられる位で、その著述などについて従来まとまって紹介されることはなかった。ここに彼の未刻稿『柳浦文集』を翻刻することによって、碩水

門下における学問継承の一形態を考察するためのよすがとし、更に小値賀島に生きた一学究の講学実践の跡を辿らんとするものである。

なお『柳浦文集』の原稿は、貞方弥三郎の令孫に当たる貞方彌五郎氏（現在長崎県西彼杵郡琴海町在住）によって今日まで大切に保存されてきたものである。快く閲覧と公開を承諾され、更に貞方弥三郎の生涯について色々ご教示を下さった同氏に対して心から感謝を申し上げたい。

二、弥三郎小伝

貞方研、字士精、通称弥三郎は、明治元年（一八六八）一月二十四日、長崎県北松浦郡柳村（現在長崎県北松浦郡小値賀町）に、酒造業を営む松本甚五平の三男として生まれ、明治十三年四月二十九日、貞方伝平（士族）の養子として貞方家へ入籍することになる。彼が生まれ育った小値賀島は、「肥州を西に距つること二十余里」、東シナ海に浮かぶ五島列島の北端宇久島の南西に位置し、岡彪郁をして「真に天然の楽土である。」（彪郁文集・巻上・柳浦書屋記）と感嘆せしめた土地柄であった。弥三郎は後に柳村の地名をとって、柳浦・柳浦子と号している。彪郁によって「島の望（ぼうぜん）たり」（同上）と称された弥三郎は、向学心に燃えて明治二十年、二十歳の秋に、針尾で鳳鳴書院を開いていた楠本碩水の門を叩き、入門することになる。「祭天逸楠本先生文」によれば、「研、明治二十年秋八月二十有五日、贄を門下に執る。」とある（楠本碩水伝・二二九頁を参照すると、新暦では十月に当たる）。この時、四歳年長の岡彪郁は数年前既に入門しており、先輩後輩として同門相い切磋する間柄になったと思われる。

明治二十二年に彪郁が上京したのに続いて、翌年四月、弥三郎は明治法律学校（明治大学の前身で、「独立自治・自由民権」を提唱して明治十四年に設立）に入学するため、東京に向かうことになる。これは司法試験の受験を目指したものであったという。上京に際して碩水は、「貞方士精の東京に之くを送る」と題する七律を贈っている。

倫理従りて来たるは父と兄　　倫理従来父与兄
何ぞ妨げん、命を受けて東京に向かうを　　何妨受命向東京

縦然今日時習を追うも　　縦然今日追時習
未だ必ずしも他年旧盟に背くにあらず　　未必他年背旧盟
雨を歴て寧んぞ言わん、花に恨みありと　　歴雨寧言花有恨
風に随いて卻って覚ゆ、柳に情なしと　　随風卻覚柳無情
烟波茫々として、征帆遠し　　烟波茫茫征帆遠
耐えず、悽然として老涙の傾くに　　不耐悽然老涙傾

（碩水先生餘稿・巻三）

弥三郎はこの年の八月、下総の朱子学者並木栗水（名正韶、一八二九～一九一四）の塾に遊学している。碩水の勧めと依頼を受けたものである。その折、彼は「性説」なる論文を作り、栗水の批正を仰いでいる（柳浦文集⑯。以下「文集」と略す）。この前後、碩水と栗水の間では、性説をめぐる議論の応酬が行なわれていた（楠本碩水伝・十五章参照）。弥三郎は、またこの時期、碩水の『日本道学淵源録』校訂増補の事業に協力するなどしている（同上・二三三頁参照）。明治二十五年八月、おそらく休暇を利用して針尾を訪れた弥三郎に対して碩水は、「壬辰八月、貞方士精来訪す。此に賦して之を勉ます」という七絶を贈っている。

曽て聞く、道を害するは多言に在りと　　曽聞害道在多言
好んで壁を隔てて聴くも、何ぞ論ずるに足らん　　好隔壁聴何足論
主静の工夫は千古の訣　　主静工夫千古訣
濂洛に従いて淵源を得んことを要めよ　　要従濂洛得淵源

（碩水先生遺書・巻二）

翌二十六年七月二十五日に明治法律学校（法律学科・政治学科）を無事に卒業した弥三郎は、碩水の命によって、在京の同門、中川克一、袋民三郎、西田龍太、笹田要四郎を訪問し、帰途京都では伊藤介夫、出雲路興通に、広島では吉村彰にそれぞれ面会し、十月下旬に帰郷している（楠本碩水伝・二八七頁）。一旦小値賀に帰った弥三郎であったが、更なる勉学の必要性を感じ、翌年正月、再び鳳鳴書院に入門するのである。書院に在ること八箇月、生家の長兄の死亡

により、生家松本家の後見役となるため帰郷するよう、母親からの命が下る。勉学の思いは残るも、親の命黙し難く、弥三郎は遂に小値賀島に帰ることを決意する。碩水は次の詩を作って、弛まず講学して前進するよう激励の言葉を贈っている。

貞方士精、再び余が塾に来り、留学すること八月。今将に帰郷せんとす。その詩の韻に次し、以て餞儀に代ゆ。時に甲午中秋後三日なり。

仰げば則ち高く、鑽れば則ち堅し　仰則高焉鑽則堅
循々として学ばんことを要す、古の賢　循循要学古之賢
頭を挙ぐれば猶おこれ前途遠し　挙頭猶是前途遠
疾歩一年、一年進む　疾歩一年進一年

（碩水先生遺書・巻三）

この時弥三郎は二十七歳であったが、彼はこの再度の入門期に結婚をしている。明治二十七年五月のことである。妻は東彼杵郡日宇村の村尾周八の長女ジン（明治十年～昭和三十六年）。村尾家は針尾の近藤家と親戚であったらしく、楠本家の縁続き（端山の室は近藤氏）ということから、あるいは碩水が仲を取り持ったのかもしれない。ともかく母の命で帰郷した弥三郎は公職には一切就かず、生家の家業（酒造業並びに定地網・底引網などの漁業）と財産の管理に専念することになった。しかし碩水との交渉は続けられ、書簡の往復はもちろんのこと、時折針尾に出向き学問上の様々な問題について質疑応答を交わしたようである。また弥三郎は折々に五島名産の塩うにと海藻（ふのり、わかめ）を針尾の碩水のもとに送り届けている。大正五年に碩水が亡くなってから後も、先生の御恩を忘れてはならないと、一年も欠かすことなく続けられたのである。（その返礼として、秋になると針尾の楠本家から名産の柿が沢山貞方家へ送られて来たそうである。）

ところで、明治十五年の開塾以来、幾多の俊秀を育んできた鳳鳴書院も、漢学衰退の風潮の中で閉院の止むなきに至り、明治二十九年十二月、遂に解体されることになる。以前から書院の閉鎖を憂慮してその存続を主張してきた弥三郎であったが（明治二十六年八月二十二日付碩水宛書簡。楠本碩水伝・二三九頁参照）、碩水と弥三郎の間で解体した書院の

築材の一部を小値賀島に移すことが企図されたようである。ところが運悪くこの材木は、輸送途中嵐のため海の藻屑と化してしまったのである。鳳鳴書院再興の夢を賭けたこの計画の挫折は、弥三郎にとって非常に残念なことであったと同時に、碩水先生に対して大変申し訳ないことをしたという悔恨の思いを終生抱かせることになったようである。

さて明治三十五年、満七十歳を迎えた碩水のために門人が相い集い、四月六日、佐世保万松楼にて古稀の祝宴が催された。この時内外から寄せられた表祝の詩文等は、門人の岡田康治が編纂して『碩水先生古稀引翼集』という九十八頁の冊子にまとめられ、この年十月に熊本で出版されている。その中に弥三郎が作った「奉祝天逸楠本先生七秩寿筵序」も収められている（文集(11)）。翌三十六年九月に『碩水詩草』上下二巻・餘草一巻、『碩水文草』上下二巻が出版される。碩水の生前に出版された唯一の書物であるが、その校訂には弥三郎が当たり、岡彪邨が出版に尽力している。

弥三郎は碩水の門に在る時から師の言行に関する記録をとっていたようで、明治四十一年頃、「碩水先生言行雑記」なるものを完成させ、これを碩水に見てもらっている。この時碩水は、「是ハ御秘蔵被成置度候」と答え、公刊せぬように言い渡している（楠本碩水伝・三一二頁）。この原稿は後に碩水没後、岡彪邨と貞方弥三郎の手で『碩水先生餘稿』三巻が出版された際に、附録一として収載されることになる（凡八丁半）。文字通り碩水の言行を箇条的に述べたものであるが、次の例でわかるように、碩水に親炙した者でなければ描写できないその日常の姿が細やかに記録されている。（原漢文）

「先生、敝衣破帯、貧農に異ならず。曰く、これ乃ち庶人の常態なり、と。その人に接するもまた必ずしも更めず。惟だ祭祀には則ち別に衣帯を具え、以て誠敬の道を致す。」（二丁左）

「先生、性、潔を好む。毎朝掃除せざるなし。几席の間、一塵をも容れず。几案の書籍、苟くも斉整ならざれば、必ず起ちてこれを正す。人をしてこれを為さしめず。」（三丁右）

この年四月三日、佐佐澄治、藤田修吉郎、古川三郎、浜本宗済、貞方弥三郎が針尾に相い集い、大谷において観潮会が催されている（碩水先生日記・四十八丁左）。碩水門下では折にふれ名勝針尾の瀬戸で観潮会を開き、浩然の気を養っていたようである。弥三郎も、「海峡屈曲し、潮流奔騰す。孤島その間に立ち、万古に屹立す。その奇その妙、勝げて言うべからず。」（文集(2)題針峡図）と記しており、その光景は師門遊学の印象と共に深く胸間に刻みこまれていた

ようである。観潮会だけでなく、時折針尾を訪れ、碩水から身近に教えを聞くことは、離群索居の立場にあった弥三郎にとって、大いに励みとなったようである。明治四十四年六月十五日、針尾から帰郷した後、碩水に宛てた書簡には、「特ニ御示教中理に深浅アルノ一語ニ付テハ兼而承ラザルニアラザルモ其親切ナルヲ感シ申上居候。」とある。この年、満八十歳を迎えた碩水のために、門人の浜本宗済、岡彪郁、楠本正翼らが相い謀って図書室を構築献呈して、寿祝慶賀の一端とすることにした。弥三郎は金二十円を出資している。蔵書室は九月十二日に上棟式をすませ、守待室と名付けられる（楠本碩水伝・三一五頁、碩水先生遺書・巻六・守待室記）。十二月の初め、弥三郎は守待室を見がてら、塩辛を手土産に碩水を見舞いに訪れている（楠本碩水伝・三一八頁）。

大正三年七月二十二日、碩水と永年の交りのあった並木栗水が享年八十七でこの世を去った。弥三郎は、下総を訪問して自らの「性説」を栗水に示した若き日のことを回顧し、翌年三月に「書性説後」を書いている（文集(16)）。そして、この頃から体調を壊していた碩水は、大正五年十二月二十日、脳溢血で倒れて昏睡状態に陥り、二十三日、八十五年の生涯を終えたのである（楠本碩水伝・三二二頁）。二十歳の年に入門して以来、ひたすら碩水を師として敬慕し続けてきた弥三郎は、翌年二月十日、「天逸楠本先生を祭るの文」を著している。既に知命の域に達していた彼は、抑えた中にも恩師を悼む気持を次のように述べている。（文集(21)）

「嗟、針峡の流、遥かに伊洛の源に接し、松岳の翠、宛かも尼山の高きに似たり。洋洋たるかなその学、温温たるかなその徳、誰か敬慕せざらんや。（中略）先生の存亡、道の晦明ここに繫かれり。後生の痛傷、固より啻に師弟恩愛の情のみに非ざるなり。」

この祭文の批正を依頼された東正堂（名敬治、一八六〇～一九三五）は、「師弟の情深きの言、修飾を加えず、文自然に章を成す。仰ぐべし、仰ぐべし。」と評している。

碩水の没後、家財を投じて先師の遺著刊行に奔走したのは岡彪郁であるが、弥三郎も遺稿の整理や校訂等でこれを賛助している。大正七年十二月に『碩水先生遺書』が、同十年十二月には『碩水先生餘稿』が、それぞれ上梓されている。前述のように、この『餘稿』の附録に、弥三郎の筆による「碩水先生言行雑記」が収められており、増補改訂版は昭和四年八月に出版されている。弥三郎はこのように岡彪郁と協力して、碩水の顕彰に努力したが、同門の中で

もとりわけ彪邨と親密な交際をしており、後に「岡彪邨伝」を著している。（未見。内田周平『遠湖小品』の中に、「貞方士精の著わす所の岡彪邨伝の後に書す」（昭和八年）という一文がある。）

ここで碩水没後の弥三郎の日常について少し触れてみよう。貞方家は養蚕業と小作人からの上米（米、麦、芋）で生計を立てており、弥三郎は村の会計役を永年引き受けていた。彼はまた教育者としての生活も送っており、郷民の子弟に読み書きと珠算を教える外、夜になると、小値賀島の柳とは反対側にある笛吹まで出かけて行き、漢籍の読書講義の会を行なっていた。貞方彌五郎氏によれば、受講者はおおむね医者や商人であったという。また弥三郎に学んだ後、師範学校を卒業し、長崎市内の学校長となった人々もいたそうである。第二次大戦後、学校教育における漢文漢学の位置が以前に比べると一変したわけであるが、ある日、弥三郎は、「小値賀で漢学を学んだのは、俺が始めで終りだろう。」と、ポツリとつぶやいたという。いかにも淋しげな様子であったと、傍らにいた彌五郎氏は述べておられる。

弥三郎は、曲ったことが大嫌いで、村会の席でも善悪に厳しく、村民からはカンカンヂヂーと呼ばれ煙たがられていた反面、物事に正確で、行動に裏表がなく、人に尽くすことから、人々に敬愛されていた。また家庭的には妻をよくいたわる良き夫であったようである。四十歳までは酒も煙草も口にすることなく、特に塩分の強いものは避け、ほとんど病気もしなかったという。「晩飯に一食を減ずれば、寿を保つこと百歳」というのが口癖であった弥三郎は、九十歳の天寿を全うして、昭和三十二年一月三十日にこの世を去った。戒名、儒光院巍誉研謹柳浦居士。小値賀町柳郷にその墓所がある。亡くなった時、彼の枕許の手箱の中には、「自分は親孝行と師恩に報いることで、一生を貫き通した人生であった。」と書いたものが遺されていたという。

三、柳浦文集

貞方弥三郎は、折々に自らが著した文章を碩水はじめ師友の人々に示し、批正を仰いでおり、その中から二十三篇を選択して、『柳浦文集』なる書冊を自ら編んでいる。四百字詰原稿用紙に書写されたもので、その中の十篇につい

ては草稿も残っており、幾度か修正した上で『文集』稿となったようであるが、この『文集』稿にも朱筆による添削が施されている。おそらく岡彪邨の手によるものと思われる。草稿段階での添削の部分はおおむね次稿で書き改められていることから、今回の翻刻においても、この『柳浦文集』原稿上の添削に従って文章を再編して紹介することにした。また同時に朱で施された校点についても、これに従いつつ、若干箇所の補訂を行なった。

なお印刷の都合上、本字・異体字は当用漢字に書き改め、原文にはないが便宜上、各文稿に通し番号を冠した。また読解を助けるため、年代・固有名詞等については、若干の注を附した。

柳浦文集

貞方　研　著

(1)　送巽先行序

巽君先行阿人也。遠来謁我碩水先生於針洲。未幾辞去。余交未久。雖不能詳其為人。意必有志之士也。乃一言以送之曰。夫始皇之暴。能焼詩書。李斯之計。尽坑儒者。然不能使天下之人皆無良心焉。然則道者。雖時有晦明。而其在人者無有存亡矣。故曰豪傑之士。不待文王猶興矣。夫学者之所可慮者。在徒談空理而不能真知実行也。何曰真知実行。曰究理能通於性命。豈非真知乎。存心能達於践履。豈非実行乎。嗚呼聖賢之書。苟用其功。則一言猶有餘。苟不然。則雖多何益。余誦斯言久矣。書以餞其行云。

(2)　題針峡図

針峡①之勝。蓋冠於天下矣。研在天逸先生之門数年。毎逢上巳必陪而往游焉。海峡屈曲。潮流奔騰。孤島立乎其間。屹立万古。其奇其妙。不可勝言。甲午②八月辞帰。眷眷之情。未嘗一日忘於懐也。頃者使画工某写其勝概。以代観潮之游。嗚呼風景可図。先生之徳。則孰克写之字哉。龍集丙申③小暑前一日貞方研謹題。

(3) 贈佐伯君学医京師序

古人曰陽気発処金石亦透。精神一到何事不成(4)。蓋人学医当期華陀扁鵲。学道当期孔子孟子。慈善柔弱終不成事也。余友佐伯君今茲学医於京師。余与君交已久。情亦厚。然而其所志各不同。一則在医。一則在道。一欲療万民之病。一欲修己而治人。此其所以不同也。古人不云乎。不為良将則為良医。医者所以助人之身命。而今君欲究之。必須立志於華陀扁鵲。勿為庸医。余亦志伊尹之所志。学顔子之所学。欲脱俗儒之域也。夫為良医。挙名於天下。而顯父母。是君之所以終孝於父母也。学道而出処得宜。不辱其身。是余之所以事天地也。抑天地之間往者過来者続。無一息之間断。光陰易去。如白駒過隙。人各従事。其所学者能幾時。慈善柔弱終不成事也。君志之成否。実在此行。願俱勉旃。

(4) 贈石井万年序

朱学之行於我邦也。得其真腴者。我山崎闇斎先生一人而已矣。而浅見佐藤三宅等諸賢。実出乎其門。其後如寛政三博士。一時傑出者也。而近世則東有大橋子(5)。西有月田子(6)。皆以超世之才。接洛閩之統。其学術之正。気象之高。称為稀世之碩儒。而月田子之門。有碩水楠本先生。大橋子之門。有栗水竝木先生(7)。共扶持名教。卓然不汚。真当世第一流人傑哉。方今世道日衰。人心日壊。不復有講明正学者。幸有此二先生。則後世之所宜就而問道也。我友石井君万年。游於栗水先生門。従事斯学已数年。其志之堅。其学之進。実有不可量者焉。研去年游於先生門。初与君結交。未久而別。今年再游。又与君晤。留一旬。将辞去。臨別一言曰。学問之道無他。去人欲而存天理而已矣。所謂克己省察者。去人欲之術也。復礼存養者。存天理之道也。而格物致知為先務。苟不窮事物之理。則天人之道不明。是非之分不弁。雖欲去人欲存天理。将何所下手乎。故誠正修者存天理乎其身也。斉治平者推之而及乎人而已。然人欲之易生。如水之就下。而天理之難存。似舟之遡流。去之存之。古賢猶且難之。而況学者乎。然則為之如何。曰在敬一字矣。夫敬者一心之主而万事之本。実貫知行者也。至其功夫。則朱子敬斎箴尽之矣。此則所聞我師碩水先生也。願君亦以所聞於栗水先生者益奮発興起。互相切劘以使斯文永存於天地之間。豈不亦善哉。是為贈。

(5) 論信玄謙信何優

龍嘘生雲。虎叫起風。龍虎相争。雌雄未決。吾於武田上杉両氏之事。甚有感焉。夫信玄之知謀。謙信之勇猛。各有所長。而干戈相交数十年。其勇猛知謀。殆軼孫呉駕信良矣。乃其戦之最大者在川中島。而龍虎之勝敗未決。後人之批評未定。信玄不必勝。謙信不必勝。猶龍待虎而知其変化不測。虎待龍而知其勇猛難制。実可謂一世之両雄矣。故曰若欲決其勝敗。在以不決而決之而已。雖然信玄以暴而実其名。謙信借義而正其名。則以上杉氏為優可也。如武田氏可謂不知所以用兵者矣。書以質之。

(6) 呈講師巌谷博士(8)書

人之在世也。父生之。師教之。君食之。非父不生。非君不長。非教不知。故古今竝称謂之三大恩。而古聖人之定人倫也。曰父子君臣夫婦長幼朋友。而師弟不与者何也。蓋師弟之間。以責善言之。則朋友之交也。以恩愛言之。則父子之親也。其名雖不在五倫之中。然其実含在五倫之中。故古人之於師。其恩如父。行而不履其影。師之於弟子。其慈如子。教而不厭。雖有君父。非師則何以得全人道而厚吾之生乎。後世聖教日壊。師道月衰。為師者以売芸為務。為弟子者以買術為分。不知其慈其恩之為何物也。今日在法海。其弊為最甚焉。吾講師巌谷先生則不然。其導人也以信義。其説法也出於肺肝。教而無不尽。問而無不答。可謂存古人之余風。而為今世之標準矣。如生等稍得知法学之趣向。以開致知之基礎者。実博士之賜也。嗚呼其恩之深。何以加之。乃相謀筆之。聊以表謝意云。

(7) 与楠本君翔(9)書

居敬即存心之要。而窮理即致知之法。為学之道不外於此両端。知而行之。行而益明之。知行固雖不可廃其一。然致知不得不謂最重也。嗚呼孔朱既遠矣。我山崎先生。以聡明之資。得遺経之旨。其統尚存于今。豈非学者之幸耶。存斯一脉。伝諸後世。以開他日太平之基。亦後学之急務。決不可譲之於他人也。此其急務。非致知則不可得。僕之所以置重於窮理。全在于此。蓋論体用之全。則明天理。以尽人道賛化育。而使物各遂其性耳。近日所見如此。足下以為如何。請垂明誨。

(8) 論稲垣公使求仏骨

古人云。行己有恥。使於四方。不辱君命。可謂士矣⑩。有旨哉言乎。方今出而為公使於外国者。不可不攷此語也。我駐在暹羅公使稲垣氏⑪。嘗説暹羅王。以求仏骨。致諸神州⑫。余窃疑公使而有此挙。以為有益於国家者乎。未能解也。各宗之徒。競而迎之。冗費如山。或起負債。而不能償。遂至争於法庭。以為有益於其教者乎。未能解也。韓退之之於唐。極力排之。不顧潮州之貶。稲垣氏之為公使。尽精而求之。費有益之財。迷一国之愚民。稲垣公使者。韓氏之罪人。而仏徒者。釈氏之罪人也。蓋仏徒而有恥。公使而学聖人。或庶乎無過。嗚呼惜哉。

(9) 愛色録序

天地之間。物各無不有其色矣。山岳則有山岳之色。河海則有河海之色。春花秋月鳥獣虫魚。皆無不然。而人心之不同如其面。所好之色。亦非無異同也。夫愛菊花傲霜之色者淵明其人也。愛疏影横斜之色者和靖其人也。愛蓮花高潔之色者周子其人也。愛娥眉粉黛之色者楊帝其人也。前人所愛。余非不愛之。然聊有異其趣者焉。然則其所好者果何色。曰志士烈婦之行。而千歳不変其色者是也。蓋花有開落。人有生死。山河亦有時桑海異処。猶至志士烈婦之蹟。則其色不変。其芳不止。永垂於史伝。為後人之所欽慕。豈非可愛之色耶。非可慕之色耶。今人往往重於文化。流於奢侈。君子無骨。学者無胆。余学大聖之中道。猶未免為頑愚。而今所抄録之人。雖未必得中道。亦頗有足励頑興愚者。此余之所以深有所取也。明治壬辰⑬冬十二月。識於東京駿河台之寓居⑭。

(10) 金蘭簿序

友者五倫之一。非有友則不能研知励行。而父子君臣夫婦長幼。未能尽其道。而得罪於名教亦間有焉。得友則否。然則求友豈可不多耶。然古人称天下得知己一人可矣。古人果不欲友之多乎。抑無真友乎。夫世之求友。各不相同。詩酒有焉。風流有焉。花月有焉。此皆従其意之所適。而結交者也。古人之所欲豈在此乎。此所以知己百年不易逢也。此簿所載。固不為少。不知詩酒之友也耶。将風流与花月之友也耶。吾切望有真知己焉耳。

(11) 奉祝天逸楠本先生七秩寿筵序⑮

明治三十五年天逸楠本先生齢躋古稀。門人相謀開寿筵於針峡之上。小子研亦列席末。謹為之頌曰。先生夙奉程朱之学。致力於居敬窮理之工。卓然為世之儒宗。壮歳罷官隠居於名山之中。読書講学。黙識心融。蓋学博而不嗜。力久而道充。内自道徳性命之微。外至治乱興廃之蹤。莫不精究而貫通。故其出処進退之際。必考之於古義。竟帰於至公。其間謗議百出。亦不敢雷同。蓋名分義利之判。了然心胸。非他人思議之所可容也。夫吾針峡之勝。与阿波鳴門。天下竝称。而奇巌怪石。屏立屈曲。而海潮通其間。当其盛也。盤渦湧起。雪飛雷轟。雖鉄艦巨舶。不能過也。可謂壮観矣。先生既住此奇勝之境。朝観暮吟。洗其心胸。養其気象。七秩之寿。豈得非有山水之助乎。語曰智者楽水。仁者楽山。智者動。仁者静。智者楽。仁者寿。蓋亦有相黙契焉者歟。嗚呼先生之所得於山水。亦已多矣。而山水亦待先生而益顕于世焉。自今以往。先生之寿。自耋而耄。与此山水永相対峙。未有所限量也。研辱侍盛筵。因頌先生学徳之懿。又序其年寿之所由来。以為献。庶幾足侑其一觴乎。

(12) 与楠本君翔書

夫身与心非有二也。故曰身外無心。心外無身。徒事一身之動容。而忘心体之功夫。則失於陋矣。徒耽一心之静境。而不用力於日用之間。則失於虚矣。古人必用功於身上。而不忘心体之工夫。如恭黙静坐無不皆然。故身修心正。而動静各得其宜也。貴喩曰。未発之境。如何用功。未発之境。無手之可下。無力之可用。僅有下手之意。則已発。唯昼間不梏亡。而夜気得其養哉。眠中不感邪夢。平旦之気自静。如此則庶幾可謂功夫及於静中乎。窃謂能用力於斯。学者必不離一身之工夫。而自達心上之功夫。必用功於已発之際。而及未発之境。猶雞抱卵自外而入内也。然習而不察。則亦不能以達心体之功夫矣。未知是否。請垂明悔⑯。

(13) 東旭香伝

東旭香名文助。越後村上藩人也。為人俶儻不羈。性甚好酒。能詩及画。常携文具。游歴天下。佳山名水。遭適意地。則流連数日。以為胸中粉本。是其所楽云。明治丙申⑰孟春。将游五島探盧山瀑。路過吾小値賀島。滞寓数旬。応人

需画山水。日得銭数百。皆充酒麹之費。毫不儲畜。劇飲善罵。蓋其天性也。後飄然去入五島。伝聞抵南松浦郡浜之浦村⑱。留宿数日。罹瘟疫遂不起。明治二十九年十月六日也。其所携除文具外。僅有短刀与念珠而已。舎主憐其死。為捐数金。埋葬其村今里郷大崎⑲云。

柳浦子曰。旭香蓋緇衣之徒耶。何其容貌之類僧也。常帯念珠亦其証也。顧旅魂飄飄在於名山勝区之間而往来。無人招而祭之者。余憐其死聊識所聞見以作之伝云。時明治戊戌⑳清明前二日也。

⒁ 祭山崎闇斎先生文

嗚呼鄒魯之道。伊洛接其伝。至朱子発揮真切。無復遺蘊。蓋孔子以後之一人也。元明以降。以儒名者。不暇枚挙。而窺聖学之門墻者。不過薛文清、李退渓数人而已。我邦応神之朝。経典始来。王公以下。学焉者亦不為尠。然於道則未聞有所得者。其後朱書之入于東方。已数百年。雖非無信之者。未能徧観而尽識也。故学焉而猶未免惑于異端。既尊此。又信彼。豈可謂能尊信朱子哉。独吾山崎闇斎先生。読其書講其学。学識之所造。実践之所及。大非元明諸儒之儔矣。蓋本邦正学之首唱。而朱子以後之一人也。嘗曰学之道在致知力行。而存養則貫此二者也。漢唐之間非無知者也。非無行者也。但未曽聞存養之道。則其所知之分域。所行之気象。終非聖人之徒也。晩年又尊信本邦神道之教。深得其伝。以為宇宙唯一理。神聖之生。雖東西異域。万里懸隔。而其道自有妙契者存焉。是吾人所当敬信也。博考諸伝。探其秘奥。発明神道。亦無遺蘊。若先生非啻本邦正学之首唱。亦実為神道者之富岳北斗矣。研不肖志学以来。一意尊信。其教之遵。今茲癸卯㉑某月某日。安置先生之霊璽。以奉祀之。謹供茶菓。聊代蘋蘩。尚饗。

⒂ 求牛塔詩文㉒引

天下之山水。大抵待其人而著。故赤壁之勝。因東坡之文而称。鵝湖之名。因朱子象山二先生之会而伝。名区之於人蓋若此焉。我小値賀島。在絶海之中。往古邈矣。中世松浦肥州公。尽力于王事。暇則往往游於此地。以故島名亦漸著。爾来五百有餘年。而公之遺跡尚存。蓋僻遠之地。足利氏滔威莫能及。或有天意以存忠臣之遺跡乎。島有今宮神社。実公之所祀其先祖也。新田其城跡也。浄善寺所蔵之辞令及仏鏡其所寄贈也。然而牛塔者遺跡中之尤著者也。相

伝小値賀古分為二島。海運其間。公大興工塡之。以為水田。当此時。用牛力極多。牛多斃死。公悼之。建武元年。建大乗妙典碑于船瀬浜。所謂牛塔是也。船瀬之為地。隔海望五島。風光明媚。沙礫青松相接。沙間之巌上。則碑之所在也。嗚呼此地因公之忠節而著。公之忠節。亦因此碑而伝。猶東坡之於赤壁。二先生之於鵝湖也。余欲集遺址之詩文久矣。然所得未多。今記其概略以求大方文雅士之高作云。大正甲寅㉓九月貞方研謹識。

⑯ 性説

天地之間理与気而已矣。自其賦於人而謂之命。自其稟於吾而謂之性。性有本然気質之異焉。命亦有理命気命之分焉。欲講性命之蘊。須於理気離合之間而明弁之也。故聖賢之論性也。有窮本然而言者。有兼気質而言者。惟在随其立言之意而会得之耳。蓋性者人物之所稟以生之理。在形気之中。不囿乎形気。一定而不易者也。即孟子性善。程叔子性即理是也。此指性之実体而言之。所謂本然者矣。且性之実体。雖不囿乎形気。亦不能離乎形気。故因其所稟而有知愚賢不肖之異焉。則謂之気質之性。夫子相近。程伯子生之謂性是也。故本然之性。則提起於形気中。而指其実体者也。気質之性。則実体兼形気者也。然則其所指雖不同。其帰則一而已。初非有二性而両立於方寸之間也。但変化気質。則愚者可以知。不肖者可以賢。而本然之性復矣。故曰気質之性。君子有所不為性焉。抑理気者二而一。一而二。気因理而立。理因気而行。外理而無気。離気而無理。理気之主帥。気理之卒徒也。故凡有形気者。必具本然之理。所謂性也。説本然之性。而不説気質之性。則不得理気相合之妙矣。論気質之性。而不論本然之性。則於性之実体。亦不明也。嗚呼性一也。或離而看之。或合而説之。各因立言之意而異其趣。朱子所謂峯嶺之看者是也。

岡彪郁曰。可以詮性論明備録矣。

書性説後

性豈易説乎。子貢猶有不可得而聞之歎。況於学者乎。然其実体無他。仁義礼智是也。蓋孔門諸子。於仁之名目。無不解之。故論語中。其所論惟求仁之功夫而已。漢唐以降。其名目且解之甚少。或以愛為仁。或以公論仁。皆不得其正意也。至於程朱論之備矣。顧学者以夫子罕言之故。可廃而不論乎。明治辛寅㉔秋八月。游於竝木栗水翁之

塾。艸此篇。請其是正。時余齢二十有三。而距今実二十五年前也。翁当時信朱説。後来著宋学淵源質疑。与吾師楠本天逸先生。往復数回。遂不決焉。客年七月以齢八十有六属續。今閲此不耐今昔之感。乃書其後。以為游総之記念。大正四年三月貞方研謹識。

岡彪郁曰。呉方往復二十余回。論性詳矣。而方終服於呉者。雖因呉之碩学。然亦年歯在其上也。弟嘗以為年長於我。往往不服。在尋常交際之間既見之。韓亦於師説論之。不啻俗士講学。君子亦時不免也。

(17) 霊亀石記

予書斎曰盈科。詩書筆硯之外。蔵一奇石。名曰霊亀。其如亀。所以得名也。或以為古代之遺物云。顧雖或不免翫物喪志之謗。蓋有取而爾也。易曰介于石。伝云。能以中正自守。可謂特立之操。是其節介如石之堅也。我欲学其節操。一也。其胸間有穴。虚霊而足入物。其智蔵之妙不可測。二也。其為物也。無欲無貪。守己之天爵。而不顧人之膏粱。蟬蛻塵埃。皭然不滓。三也。有此三徳。是以愛之撫之。猶古人銘器物以自警也。庶幾免翫物喪志之謗歟。愛翫之餘。聊識所感云。

岡彪郁曰。石且霊。人豈可頑哉。

(18) 題范蠡載西施図

色之禍天下也久矣。人豈不知哉。然知而不真。故不至覆敗不已也。今観此図。不能無感焉。越用范蠡而興。呉因西施而傾。良臣可不用乎。女色可不戒乎。呉越興廢。載在此舟中矣。

岡彪郁曰。雅潔可愛。

(19) 論求仁請誨天逸先生書

孔門之学。以求仁為第一義。其心法切要之言。則唯顔子得聞之。而仲弓次之。蓋二子之求仁。雖随其学之浅深。而有乾道坤道之不同。然出門如見大賓。使民如承大祭。則復礼之事。而存誠之功夫也。己所不欲勿施於人。則克己之事。而閑邪之功夫也。其為乾道坤道也。譬如有以利刀断物。与以鈍刀截物耳。於其熟処則一也。司馬牛以下。則各

就一端而教之。其言也訒者。以牛多言而躁告之也。仁者先難而後獲者。因樊遲之失而告之也。然司馬牛樊遲。因是而用力則可至賢者之地位矣。抑克己者勝私欲之功夫。而其為功夫也麤。復礼者全心德之功夫。而其為功夫也精。雖各有用力之処。然二者之間不容髮。而人欲尽処。莫非天理之流行矣。蓋不仁者礼之未復也。礼之未復者。己之未克也。故必尽克己私。而一帰於礼。則事事皆天理。而仁在是矣。研稟受至偏。七情中怒気最甚。受業之初。読謝氏克己須従性偏難克処克将去之語㉕。有所感。爾来用力二十年㉖。未得其力。加之有多言之僻。常欲禁其躁妄。未得下手脚処㉗。縦令不得至非法不道之地位。亦欲無傷易則誕、傷煩則支之蔽。請垂明誨。

天逸先生曰。大概得之。

⑳ 聖廟古瓦記

此為曲阜聖廟古瓦。余友奥川氏所贈。其形獅子。其色青黒。以周尺度之。高六寸五分。周一尺一寸六分。古色可掬。蓋数百千年外之物也。奉之拝之。鑽仰不置。恭敬之心。不覚而起。喟然之歎。忽焉而発。予且然。況於游孔林謁聖廟者乎。況又於当時親灸聖門者乎。維時大正乙卯㉘春正月元旦日東後学貞方研謹記。

岡彪郎曰。古瓦定奇。弟他日獲観亦可為記。

㉑ 祭天逸楠本先生文

維大正五年歳次丙辰十二月二十三日甲午。天逸楠本先生易簀於正寝。越丁巳㉙二月十日癸未。門人貞方研。乃能銜哀致誠操文以祭告吾師先生之霊曰。先生明足以察天人性命之理。行足以励忠孝節義之道。択交今人。則恒無適其意。尚友古人。則或有会其心。其学入自山崎氏。而出自山崎氏。深信程朱学術之正。傍究諸子百家之説。莫書不読。莫学不講。実斯道之砥柱。而天下之宗師。而至其道之所蘊奥。則非後世小子之所敢擬議也。嗟針峡之流。遥接伊洛之源。松岳之翠。宛似尼山之高。洋洋乎其学。温温乎其徳。誰不敬慕乎。若夫先生聖学之統。進而未獲大施。退而未及後伝。先生之存亡。道之晦明繫焉。後生之痛傷。固非啻師弟恩愛之情也。研以明治二十年秋八月二十有五日。執贄於門下。爾来悠悠三十年。久辱教育。恩義共深。是以痛傷弥切於身。今也儀刑永隔。高風何仰焉。嗚呼哀哉。追

思平昔。涙落懸泉。幽冥有知。幸鑒此誠意。

東正堂㉚先生曰。師弟情深之言。不加修飾。文自然成章。可仰可仰。

㉒ 題三猿像

三猿像。伝言神代之遺教也。上者以手蔽目。不視物也。中者塞耳。不聴声也。下者閉口。不発言也。其不発者非不発也。教人以不言非礼也。不聴者非不聴也。教以不聴非礼也。不視者非不視也。教以不視非礼也。蓋有道者之遺教。而与孔子之教顔子之語暗合。豈不奇哉。予視此像。愛玩不措。因有深感焉。凡人与聖人同者性也。其異者気質也。救其気質之偏。而致中和之法。則克己復礼也。然而其細目実寓於此像矣。嗚呼顔淵何人也。予何人也。既已志学。則其窮理之精微。若彫刻之微。寡欲之工夫。亦若此像。孜孜不怠。庶幾可以進其徳矣歟。

岡彪邨曰。奇想与実学合而為妙文。

㉓ 静修園記

医師梶野君。我小値賀島笛吹人也。頃築仮山。請予其名。乃命曰静修園。一日游焉。巨石為渓。躑躅茂生。十余之石燈。散在其間。有老樹。有盆池。四時風光。莫不皆佳。而蜀魄啼月。鵑花滴血之候。則佳景中之尤佳者也。君三折肱而窮其術。治人疾。冷静以切脉。修己身。主静而養心性。当其黙坐澄心之際。宛如巨石之蟠於園渓。不為利欲動。至其治疾救厄之術。活潑潑地。其妙殆似池魚之躍於波上。救治多年。杏既為林。若君者。蓋医中之隠君子。園之名可謂副其実也哉。昭和四年立春後三日貞方研記。

〔註〕

① 針尾瀬戸のこと。

② 明治二十七年（一八九四）

③ 明治二十九年（一八九六）

④ 朱子の言葉。『朱子語類』巻八・10丁（和刻本）

⑤ 大橋訥庵（一八一六～一八六二）のこと。名は正順、字は周道、号は訥庵。佐藤一斎の高弟であったが、最後は専ら朱子学を宗とした。

⑥ 月田蒙斎（一八〇七～一八六六）のこと。名は輝、字は子謙、号は蒙斎。崎門の千手旭山の門に入り、学を楠本端山・碩水兄弟に伝える。

⑦ 並木栗水（一八二八～一九一四）のこと。名は正韶、字は九成、号は栗水。大橋訥庵に学を受け、朱学を信奉する。

⑧ 明治大正時代の法律学者、巌谷孫蔵（一八六七～一九一八）のこと。肥前杵島郡武雄町の出身。明治十七年東京外国語学校を卒業、翌年法律学研究のためドイツに留学。同二十四年帰国。東京専門学校、明治法律学校、東京高等商業学校の講師、第三高等中学校教授を経て、三十二年京都帝国大学法科教授となり、民法を担任し、三十四年に法学博士の学位を受ける。翌年北京大学に法学を教授し、大正元年には中華民国法典の編成にも参与する。

⑨ 楠本正翼（一八七三～一九二一）のこと。字は君翔、号は晦堂、別号鳶魚斎、遜斎主人。楠本端山の子で、『宋明時代儒学思想の研究』の著者楠本正継博士の父君にあたる。

⑩ 『論語』子路篇に出づ。

⑪ 初代シャム（暹羅、現タイ）公使であった稲垣満次郎（一八六一～一九〇八）のこと。肥前平戸の出身。上京して中村敬宇の門に入り、明治十八年、旧藩主松浦厚伯に随伴してイギリスに留学。ケンブリッヂ大学に学び、ロンドンで『東方策』を出版し、名声を博す。明治三十年、シャム公使館開設と共に初代弁理公使となり、同三十六年スペイン特命全権公使となり、同地に客死す。

⑫ 明治三十三年（一九〇〇）、稲垣満次郎公使等の斡旋により、仏舎利がシャム王室より日本の仏教徒に贈与されたことを指している。この仏舎利は、イギリスが明治三十一年に当時の植民地インドで発掘し、シャム王室に寄贈したものの一部であった。日本の仏教各宗協議の結果、奉迎使に大谷光演（正使、大谷派）、日置黙仙（曹洞宗）、藤島了穏（本願寺派）、前田誠節（臨済宗）の各師が選ばれ、随行員として忽滑谷快天、南条文雄外九名が伴い、奉迎のため五月シャムに渡航した。

ワットポーの大寺院で授受された仏舎利は、七月に長崎に到着、京都に安置されるが、のち名古屋に覚王山日暹寺（現日泰寺）が建立され、ここに納骨される。長崎及び大阪で催された拝迎式の模様を、随行員の一人であった南条文雄は、「ともかく明治仏教界、空前絶後の盛況であったと言ってもけっして過言ではない。」と述べている。南条文雄『懐旧録』仏骨奉迎の章（平凡社・東洋文庫、一九七九年）、西野順治郎『日・タイ四百年史』第三章（時事通信社、一九七二年）を参照。

⑬ 明治二十五年（一八九二）

⑭ 貞方弥三郎の明治二十六年八月二十二日付碩水宛書簡（九州大学文学部蔵）の封筒に記されている差出人住所によれば、「東京駿河台東紅梅町二番地　笠原方」とある。明治法律学校時代の寄宿先であろう。

⑮ 『碩水先生古稀引翼集』二十五頁所載の文章と比べると、かなり文字の異同が見られる。明治三十五年以後、何度か文章を推敲したようである。

⑯ 悔の字は誨の誤りであろう。

⑰ 明治二十九年（一八九六）

⑱ 現在長崎県南松浦郡上五島町浜ノ浦（中通島）

⑲ 現在長崎県南松浦郡上五島町今里（中通島）

⑳ 明治三十一年（一八九八）

㉑ 明治三十六年（一九〇三）

㉒ 楠本碩水に「牛搭」という題の七絶がある（碩水先生遺書・巻四）。

㉓ 大正三年（一九一四）

㉔ 辛寅とあるが、庚寅（明治二十三年、一八九〇）の間違いであろう。大正四年より溯ること二十五年で、貞方弥三郎二十三歳の年にあたる。

㉕ 北宋の儒者で程門の四先生の一人である謝上蔡（名良佐、字顕道）の言葉。『上蔡語録』巻下に、「克己、須是従性偏難克去処克将去。克己之私、則心虚見理矣。」とある。この語は、朱子の『論語精義』巻六下にそのまま収録され（ただし難克去処の去の字を欠く。）、更に前半分のみ『論語集註』に引用されている（須是の是の字をも欠く。）。

㉖「用力二十年」とあり、碩水に入門したのが明治二十年のことであるから、この文章は恐らく明治四十年頃書かれたものであろう。

㉗自ら欄外に、「天逸先生曰知其躁妄即是入手処」と記している。

㉘大正四年（一九一五）

㉙大正六年（一九一七）

㉚幕末の陽明学者である東沢瀉の息子東敬治（号正堂、一八六〇～一九三五）。沢瀉父子と楠本碩水との関係については、荒木見悟氏『叢書日本の思想家・46』所収「東沢瀉」（明徳出版社、昭和五十七年）を参照。